雲萍雜志

一

和書門
類 二〇七九七
號 六〇
函 九
架 四
冊

内閣文庫
和書
類 二〇七九七
號 四
冊
二二一五
函架
238

内閣文庫
番號 和 20797
冊數 4 (1)
函號 212 238

212-238

浸

隨筆 十三ノ二

国立公文書館
National Archives of Japan

雷神太鼓

青木鷹雄
鈴木雷神

東京 博文館蔵版

国立公文書館
National Archives of Japan

柳里恭先生隨筆

雲泉雜志

東都書林　靖共堂
青雲堂　梓

浅草文庫

雲泉雜志序

柳湛園ヽ為人天資風流温雅而摘且胷中ゝ洒落世以所知也常以書畫所遊一時有名之士無不往来者都鄙羣苑ゝ客無不識湛園者其

平生隨聞所錄積年重日二十餘卷多是勸懲之話説や
予澤之本遂為予藏弆須臾
中井某者撮其旨趣補之缺
畧題曰雪萍雜志予曾毎用
暇寓目則如對其人焉聊弁
数言於卷端云

丙辰之秋日

浪華蕉葭堂主人恭識

予が性格歴を好み名称我称の癖あり西遊社初
め派華の薫蒸を討ふ雅筵暑を接すること
時々主人一書城出し柳汪園手沢社随筆ふく
いとおもしろきものゝ中に予交々古を傳ず世の
以まめ人ゆをしへらるもあるべきことかゝる手業をを
あつてあさだやぐて一本をうゝうひをさめ
を世ごろ書捨れをとめまよまく兼ひよきうがへ
あるゝ名抱花園のあるべ識

柳湛園柳湛氏諱里恭字公美一号玉住通稱藤蔵大
和郡山円城の士なり文学武術を始て人の師となる不易
蓋十六より及ぶとぞ佛学さへ人倫ゝ僧舎論を愛し僧もあり
りとも中ゝも南不出ば朱舞乃傳来の緑色社法を紀乃
祇南海ゝ学てより人和の没色世に花を業す水木淡し力を
用ゝ揉洗ゝ蔵すゝ家ん乃人暖達不拘者を好こて才不
才といば家食せるの幾人ゝいの数を考ず或ハうゝ
めゝ来ゝる者を多年を経ゝ畢さず家禄多ゝ花ごゝこれ夫
免ゝ乏しきゝ多ゝ初業の年候使ゝゝ登極の乃業乃あ
郡ゝのゝゝ活いで大雅者ゝまゝゝ歓ゝこれより往来

たゞおく附大雅大和より彩しゐ酒費尽くれば仮初より主人を
て是を傳るより俗の如くこゞの門を来て書さゞ家居又つゝを
あり幸よろぶ多りて門を好むゝ社病を除免ゐれ多欲乃
ゝめに身を上しゐんと憂といふこゝゐ大雅陳ゝ雪西之流
て四ゐ陳より陳ひゐゐ止ゝん少ゐず八来より墨んと主人を戒
ゝゝ陳ゐも浸ハゞ墨しゐゐゐゐゐゐゐ門を堅く来て書ゝ
む大雅終より素社姫を載て陶しゐん又ある附より浸君救多引
つ三る上まて孫孫を色ゐ女色丐の弦ゐして孫を色ものまあ
ひゝゝやゝゝ雪絃をゐて自孫すきびて典ゐいゝ含を与ゝゝ玄
まゝゐとより妙手ゐき九丐ゐ人の不主ゐ出ゐハ王子獄ゐ似
たりゐやいゐん書を好む八鄭荘孔和尚の風あり 近世時人傳抄要

抑里恭 桔

京ゐゝゝ大佛の餅饅頭流行しゐゝこまて高ふうちゐ四条
瞬ゐ二丹饅頭を鬻ゐる千を江上味といふものあり或附又世先へ
色食来りて饅頭球十だゝり夢りゝゐれとゝつゐ主人いゝ
来ゝ旭人ゐを高ひゐれと云色食のゝゝゝ家あとゝを問ゞ
人ゐり残をりて買ふゐ高ひゐれをいゝゝ夢ざゝやこの理りを
実ゞゝて買ゐれどゐる主人を御接拶ゐあゝて居ゝ居
ゞ買るとのあまりゐまゞけゝゝゐバ主人又セ先へいでゝさゝバその
徐ゝゝ実すゞゝ下に居れとゝ色食ゐむゝひ汝ゐでき色食
ゐ夢ぬとゝるその子細ハ色食とゐゝゝゝやゝれ菓子を食ん

と申しふ不和存いたんくさ子しを益ますます耳あれバ安あく居
しと乞食ゞ切ゞくるる子拭ふ捨あき赤つる饅頭ハ暑者乃
製ハ八あるゞ殊ふ上ふ子造りるく言葉ハ方つと考る菓子あり
左ゆるゞ乞食子どの分際ハて食べき赤ハあるゞる子ハ汝ま
しゞ家の菓子を食たく名ゞ人あるくのゆれとありるく浮
ふ求めハ来るくしゞ汝猪人のあれとと蒙りたゞる奇命を
汚子ゞく子を踏るくゞ殊あれどとて上菓子を食とのあるべきや
世をおるまゞざる不届ハ接ありとくゞ行べき赤ハ汚更を居先
と塞ぐべるるずどいるくゞ叱るくゞ追立ればるれ乞食ハ阪ハ
えるくゞ何処とも赤く逃失ぬ
世を治め人聖君賢主ハ一言りるく天下の規則とあるべバ倫

言汗の如くゞ出るくゞ赤びるるゞざるれ強あり武家ハを二言な
くてひひ出たるとを遠つぶるるハ結るる人乃常赤りさあるる
農夫町人者ゞ大るくの人も武士ふ二言ゞくいふとハ知るる家
ふ赤ゞのハと已ふり不料者をるるべきのふ約束くくふ羽もるふ
遠ひ今ひたるとを浮ふゞて義理をるく軍ずるず多
とひ農夫町人るるも義をるることあるれバ赤の赤ゞ家もと
乃ゞざるるりある家ハあるゞ五十ふ家のるる妻乃子まるるけ
五ゞ浮雲をむるふ年ひとるるゞ客の悦ふ来りて酒宴を催ハ
赤るるるれ子ゞ赤家ハくゞ浮妻ハサ五家あるるゞ二人ある雪
座に出くくとも客をめて赤ハゞ主人孤所のるるあくゞ
奥ふ乗くて云るるる家ハ五十五家ハて二十五家ハ妻ハ

拙こゝまとふをくるげあ〜とうども縁のつゝたとうゐてより
どうあ〜ざれば〜あるべ〜あるまじ〜ば悴よ弟〜面目をも失ふこと不
まかく〜あ〜びたるやうすを見るよ悴が妻ゆ〜てお蔦の年ごろ
あ〜とうひるべつ〜ろ好事あとそれ子と終よひるふ角〜て家
よ居ることけいで他國へ奔ぶまうとうやうの親〜
る一云より若輩のんこゝろ基とうあれる外り人ハ多言を信じ
て〜多言ハやがれあり識をもとめ事を亡すハ口より農夫町
人〜うとも一言とうゝ知ら〜一言ありて不知とゝるハ古人の識
やつゝ考むべ〜

○

あるハ時刻を知らん為よりゝ自鳴鐘を求めんらゝるとうの
書見をとゞめてゆひるハ明れふうる世話のうるあゝずうひ

たるおゝふハるの除を費し自鳴鐘れるうゝ時を失ふこと
多〜〜んやめゆへとつゞさあゝバ庭雪を飼〜とのふふるれ書又
ゝめて云〜〜ハ時刻ハ人のうつよりの汝乃滅千もこ五ともゆ〜〜
ゝ〜自鳴鐘を使りとするハ勤めよ高りのつゝたとあり
と夫を除めつひよ雖をとゝ飼ずあり
山科の陸士ノ書ハ刑休と号ハ刑休が媚あゝ世ノよ徧
多きとと常よいきどりつ又考人ふ羅ちゝとといゝ歌ゝつな
よ人にかゝ〜〜刑休ハ幼ときれ人ゝとあきん外〜ふ今ハ
志高〜あゝ〜〜ゆ〜〜と人あゝ五人を二十年づふ〜〜志の
変ずるれよや家も四十家ゆ〜〜〜〜自〜乗るの志気ゝる
あれり刑休ハ人の盛あることゆを知て惰ゝるゝの嘉ゝる和城

知らざる若者世のうつりうを飛鳥川乃淵瀬はたとんぬ
れども人ハ智恵ありてとゝろれよゆゑ疾〳〵ひれば人ある事のを身殘
実土の堅きを亟ず世界を美拙と觀ぐく輕くとゝろれ〳〵ゝるさ
やうあやとちよハあくねど情欲限りあり知恵ハ身を全ゝ〳〵知ゝ
ざれバ禍を招ゝ蓮亂ハ蝸牛ひとしく家を滅中ハ曳く家ハ
繼ぎ〳〵他のをまる究を前ハ生涯を石刑ハ先
よくゝ〳〵ものきやとゝとを多りとつとゝ世を終るの年
ゝづゝうが書る經冊を買ゝ〳〵灰と化〳〵風雅ハ身とゝを終る
とゝく没しぬ憂居士と号ず
夫婦の中れゝ〳〵ゝを礼あゝうちハ敬ゝろ〳〵ゝの情を以て涙
ゝ又孝〳〵礼を失ふ財ゝゝれ情自然と落〳〵〳〵離別ゝまゝ

遠きゝあゝず仁義遜謙ゝ礼を存ゝする社中だちゝ〳〵ゝ乃
礼媚諂と背を金尺智ハ嘘〳〵ゝ誠ハ嘘と謂ゝさあれバ
仏安ゝ〳〵と愛恵ゝ〳〵ゝいつと円居と知ゝべきゝ
長田の左司ゝ義朝を討〳〵を不忠と書たれども長田の左司
ゝ尾張社殿の内海ゝ平お国より領地を賜ゝて居ゝ
ゝ内海の左司ゝ義朝妻縁ゝよゝ〳〵左司を使ゝ〳〵て
忍び居〳〵と不覚ゝ〳〵ゝ左司ハ立ゝ生ゝの商ゝてゝの祖勅
勅ゝとゝあゝ〳〵尾張ゝ孤せゝゝ子孫内海ゝのゝ〳〵ゝあゝ〳〵ゝれ
是義朝の伝蒲田三傷ゝの浮遊世〳〵〳〵西佛法師とゝふ達江ゝ
國ゝ祈りて武義お接の百ゝ終ゝ〳〵ゝふ達江ゝ蒲田三傷ゝ来て
ゝ義師達ゝ

治の清水ちかく青羽乃瀧ハ応永年間より新ふ水口を設けて此
ところへ水を引たりそのむかし青羽山のうち谷へ落るとい
ふ山瀧を汲て湯あつくするときハ癪を愈すこと功あるをもて諸
人下流を汲ま水上ハ東山の東より こゝふ青羽の名をとゞろ
村の社も清水ちかのいまゞ学創ふき茅ふあまバ地主権現と
云観世音ハ此社地を借たるゆゑ乃名ハ庇を貸て表屋敷
云らゝ世間のかゝひ大坂ふと此俤ゝ多ゝ人も是とひとゝ
已主ゞ産れゝ地ま存りて家を堅固ま修め家を大切ま斉こを
かりがきゝあや人ゝ他ふま出世するの多ゝ存ゝま居る財
ハ已主ゞ我俤をゆるまひまろづ油ふゝゝ家をゝち家をも失ふ
他ま出ぬるときハ堪忍をいたゝとハかゝまま堪忍く油ふかけまバお

のゝ治ゝ家を治め家をとゝのふかゝまずゝ存ゝまあゝく他ま出さ
る社人をあさバ家を捨ずるのるゝちかゝるゝ四村明神ハ在世乃
ゝきりを人欲の私するを嫌ひ世を救ふ社人ハ治ゝ
まけまずゝ庇ゝて表屋をゝられ家をゝとひハざるゝ
ゝ凡人ハ唯家を修めんををゝゝ存ゝをゝるゝことあゝ
らゞゝ知り
ゝ人ま者ゞまの凡遊と云ハ人ゝつどひひゝ後話の中ま人ゝ家ハ
言ふゝく戯主ふを云ふ者ゝ者ゞ女ハ者づまる君ゝふ事を略ゝ
者俊の対ふて用をする者ま毒矢五寸乃玄一尺を放ゝて
のゝふ射ハ瘧を去ゝ治と何果の拘語せゝ礼ゝとあゝ今やゝの
ゝ治ゝ絶ゝ礼ゝゝゞ

よきことをせんとすることをいと難しとあり兵あり きゐ移るすべとだよん
を用ゐることを執行あれ 執行ハいろはぐといふ限すし身を終るま
ですべて執行とは己れ女子ハおのれが一箇の料管をも
つ身と云んとをもうくるこの親これ義やうきゐ縫ふこと分
どをハ好みて音曲琴瑟を習ひつるを捨亜くハ親兄弟のるもち
あり是ハ人を侮りとせざる育やうよて縫つむぎの業をあらざれバ
女性をうしあふるの智男より サきゐのゆ名おのれをたぢく
よろづ嗜むことを考こせざれバ人倫ようづまてるかまひ出来れ
男去バとの礼義明たりとも法こ陸して人の義明を常れ難と
あるく身をもるべきこの者
ある人文育あるものを吳兄して世乃支配を他の事ハいるず唯

愚思の二字をよくもるべしとゆるべ文育の人ハ陸をもとむけ人ハ
んとハ四字まく侍ずやと指をのてるべ人乃許よハあべ遠つ
るべうんゆんと四字ふく侍ることハ吳兄せ人云思味の人ふ愚
思をたえものぶとよくて三字ありとゆるべ又ゆるべをかとむけこえ
ものぶあべハ又一字ゆえろう五字と助り侍るべ何と仰あるとを
都ホハ四字と却りひ侍ることハ四字あるべえんハいう侍るありとい
つるふるの人又言故ゲ如き君味の文育ハ実ま諭しがたく人ハ似
て世間指ありおのまぶあるよすべと大よいきどあり兄れバ文育の
人笑べ何とも仰あるべ都ホハえんれ四字を知り侍ることハ恵
口せくれてもかくも独立侍べざるありとべく笑ひ居しとぞ礼
智ハ及ばべく雪思ふを却すぶづべず

○江戸ゐなかの学ぶ者、交友に佐伯何某といふ人あり書を好みて食事の傍らも足曳とする為に書籍をひろき座敷に置て足居ながら雪舟ひ篤実なる常に机上ハ書をひろげ変て寒社上よりあれば一冊たりとも本第の出入をつゝして昼を戴きて夜あつうふとて寧ろ徐ろにふでーある書林の足もと書籍をあつべおきて其の上をまたぎ或ハ漏こえなどすることを足くるの書林ハ出世あり難しとイ又代の書商の家まりて求る時ハ社書をいとぎきてハ出いとぎきてハ元つゝを足くやぶく上も多き書棚とあるべきに悦ろ歩又ゆゑ大学三章句の序文より身を修る人と為る社ゝまおいても いまゝ必ずしもすゝ補あくんばあるべと云付を足てハ後を

かぐして人と生まれ人ものの志すところ傍者ならべとなども
思ふ人ハ一ひろ此人社付ず大学に能ばるとあるハ悔るとく
形り悔るとも人ゝ仏法師あるべ乃ゝ乃ゝのやうに人倫たるも
のあまでと常の人ゝくも五常とよく悔りはるべ社ゝ身を
行ひ人ゝも義別さゝるものふあるべ世ゝ悔る者ハ稀ゝて
巧知りくる人のゝ多くとゝ実ゝ確言といふべ
世ゝ云行ゝ飾りあるものを足えば社として識ゝ足えハ先
礼社端あり足えかきハ大りくハ不孔あるゝ社多くゝ人を自
負するをりくゝ多人ともゝ勤ゝ自負も亦ゝ其あるべ自
負ゝも足えゝを善あるべゝ行る人大道を好く板逐ゝく

おほよそ人ごとに唐土の劉伯倫李太白などの如くひとり人間一生終てまの世をるさんと名ゝ酒を飲ばかりを楽むとなどを予ハ一日も酒形なれバ酒あるゝ時むづかしくふるまくもなるべしとて飲まゝ酒ずまに茅舎を設ず此人ハ何の功ありとなむ只酒飲をを一芸と自慢して外ハ扶ぶの能もなく能形し猿ゞ大酒をゝるを何をおもしろき人とハすべくゝ劉伯倫李白ハひろまゝの学士ゝゝ天下をも治むべきなどの器量ある人なれども侵人上ありて賢者を退ける世なりせバ用ひられざるを為りて自さけてをれ為を為り時を変ずる心よりして届ぬをを歎息してを残念れんとゝ欲む酒なまバ大酒をゝるとも酒なりしろきゆるまひ

あるゝく天下の酒客ををいふべしゝ酒好みゝく大酒するやゝゝを生涯ハ糟糠ひなり人も器物もつゝひるれバ捨ゝ法ゝ是を惜ずとき捨ず息災ゝゝ子中庸ありを不及おきハよろづ中くたをを

○

小人系居して不義ををすとあるとも小人なるゝとを系居不善残形すのの所ゝゝ沢されバ獨居ハ系をこのゝむをハとゝ大ゝさ接なゝ陋居する宰世間さ多ゝ自得して世塵をさけ名ひすゝゝ系残道ゝをの捨ずみゝゝ陋居ふゝらを為を貪ゝ世務不熱者するハ陋居ハ拙く陋居にあゝずを世ハ陋宅を標札多ゝゝふても知ゝまゝゝ

○

為者ハ不用の財を貪ゝふ労ゝ貧者ハ用の財を法ゝるを乗

む。無用の財は限りなし。用る財ハ限りあり。限り有る身を以
て限りなき財を求れバ死に至るまで貪欲尽ることなし。され
ば身を労して財を蓄る時ハその身終り用る財ハ用の足こ
と我楽むが也。寿を害す財ハ不用といふとあるべからずと
なり。ふかのむまでも日用の外を散ずる財ハこれ不用の財なり

昔奈良に破貝といふ墨師ありしが父世に在すころなる乃
家盛なりしが後ハ墨を商ふ人多く職人も数多成りしが
人の妻と密通の事を隠れなくして其地に身を置がたくて其
乃妻と共に奉公まで近江の大津駅に手跡の師となりて世銭
過ごしぬ。五年ほどを経るに妻の奈良に捨置る女子
父におくれて便なく人を頼めなく母の大津に在と聞てしたひいで

たまでくも便もなければ老こころよからぬ筆みなく京にある門吉
れ女こそろのうし前ろうしこさ衣よひあまくうちふにそくろうしつ
る衣装をこぞりて乃こぶねをも奪はれ終に乞食となりて大
津にあるまいと雪の多く降りけるころ破貝が住くなる家の
軒端に女子は乞食薦をまとひて軒に臥しなやめる声の聞
えければ夜半に破貝は扉をひらき付入るよりひとりの女子なり
不便に思ひ妻にこのよしをいひの隔て妻も哀みて女子なる
よしを思ひつるよく介抱して内へ入れ土間に莚を敷つかはしてく
臥さしめ明日を待て出しやる時何度のその身は果なやと問
ければ我が奈良は角振といふところの者なるが母の身
持よろしからで父は亡くなりひ家出しぬへど今ハ父もなく成り

家のあとつぐべき君もあしきことを何となく何国へか行給ひしバせ
んすべなくて母の大津子まし〳〵すと聞て尋ね来つれども今子
逢ず乞食となりしハ京にてあしき者にたぶらかされて袖乞
せしといふよし磯貝夫婦ハよく〳〵思ふに妻が子ありけれどもいひ
もぞんぜず頑となるにや乳母のち子にある残る人子父なくして送てそ
そこにたのもしく住しめおきし孫子他へ嫁せしむ是ぞ人の因果ハ過去
の業といへども善悪の應報三世ハまさしくなりや現世に報ふる
ことかくの如し
江戸葛飾の郡なりける千擺り傍といへる村長あり何る年の末始
勢大神宮へ参詣を奏せんとて村民十三人とともに御師何
某が家に宿るに山海の珍味を並し馳走ありて後おの〳〵に

薄茶をあたへせんとて案内して茶室へ招請しけるが彼の村
長を始めとして十三人席に着けるが御師ハ丁寧に手あてさらし
てんを配り茶を運びて接待が前に出しおきけれども農夫の
身なれバ茶席の心得ハいさゝかもあらざれバ大きに心をくるしめ坊
うそ〳〵と思ひけるにつかずして飲べきやら乃ゆかにも茶ハ飲さ
る上手で頭に専なれバどうか申しが十三人へ一杯ずつの茶を飲
うけまはしたりとも足るべからず又ひとりして飲む他の者の人
臭ありせんとていかがあらまでどもこれ村長の身として今更噴く
飲まんも口をしきことありとさぢしなれ〳〵ちゃに思ひのほからすく
ちそ御師ハ先に出せし口取菓子を村長が前へさし出し いざ
目さきの物とあれバ茶を立あげて残らず飲ミ前てお

きりまいれば御師ハ立て茶挽をとりつぎ又まづ村長が前へ持出しつゝ
いざ菓子残りなくとり給ふべしこの度ハ菓子を取て喰ひまた茶
をのこさず飲て又おきたれバ御師又取てもとの如くたて
て又村長が前へ出す村長いひけるハ我等ごときや深山にさされ
とり出す物さへあらバ次の方へ出おくりあるべしとてこの吸茶にて
各一挽づゝ飲辞退しけり座しきへ入ておのおのひそかにそのいん
労をとりて臥し又も茶の饗応あらバいつはりし迷惑
すべしとはやくいとま乞して帰京するまでにおもひしてあるを待
し農民どもりて後権禰宜の傍によりて来りて長ひきてのけ
へこの事をいひけるを問ければ過し年伊勢まで詣て土産を得し
を給ひて茶礼手続を教へたるなるべしここをしたがしの事を知

がくり今手に手にまいらせかくまづ々しく又口をとしておぼえしといふ
に予大に可ならびしそのかみ八日ごろ子似げなき不見識の人
なり農夫ハ農家の業を知りて農業のことさへしらバまづ
恥かしきことなかるべし茶ハ山雲隠遁の手すさびなりしその
乃日君子見れりといへども農夫町人などのいとなむべきことにあらず
ず世をのがれし隠居の後などハともあれ其許めし茶を学
ならば一村こぞりて皆ひとしく農事に怠りなば田畠もそだつまじ
不作なるべし村長茶道を知らざるが故に耕耘収蔵時にしたが
ひ国中百人耕作して五十人は遊民なれば其国かならず飢ぬ
べし百人耕作して十人あそべば其果実豊かなりと是ハ権
禰宜感じて茶の湯を習ふ心をおもひとゞまりぬ

五陰盛苦とてまたあり聖賢の記よりいでゝ世業をなすの基人間安穏は大悟なしとく修身斉家の枢機なり是我まもる時ハ労する事なくして家富栄へ足をちゞめざる時は衣被ハ何の為になる寒きを凌ぎ暑さをいとはんが為なりされバまづ寒からんで善悪らずして善ば無徳にてを厭てはあるべからず美服を奢るハいまだ寒暑の身に在てざるが為取り寒暑の身にしくなハ裸なくもいとふものならべからん食事も何は為にらする空腹をやめん為なりさればこそ淡和ハなくてもありなん淡物なくて食は進まざるハいまだ飢は至らざる也飢たる時ハ糟糠もなきものハず家ハ何は為になる造まて雨露をいとはんが為なりされバ宅益は生死までれくてありなん火の災ヲ

家を失ざる人の軒端なくてもいとふ者あるべからん妻は何の為になる持てる子孫を嗣がん為なりされバ子孫なるこその八妾なとくもたくあるべし妻子あるが上に妾を持ち色に溺るゝが為に且財ハ何の為になる求むる世計の第一衣食住を足さんが為なりされバ義をうき恥をもちてまで貪るもおよぶまじきことにこそ

飛喜百翁が利休を招きし時西瓜に砂糖かけて出しゝければ利休砂糖のなきおを食ひて帰り門人に語ひて百翁ハ人に饗應することをしらざるなり家にて西瓜を出せしが砂糖をかけて出せり西瓜ハ西瓜のうまくを持しあれをしらずいかゞきゝつまひなかるに笑ひ侍りき

蕃椒をすゞれる功能あることの有り続くれ業稚子さゞの
能毒を記せどもさるべきあるべず五穀をそじる所酎醤油衣
狩調度のたぐひ多く全て五附ハうびを生ぜず中の食とす
山野幽谷乃霧雰家内湿雰の気を通るゆハ古の掬に至る
業寺

唐代支宗の時州郡ゆ多き院多き所ゆ那これが為ゆ迫
められて民耕田ハ餘子と殘しく残れち院を没入すべき
よ一変支宗ハ大宗のゆハやう重罰ゆ与ゑあるまゝ法
報報者有るべざるものれを仰せあり一より与を没入すること
をやめるとぞ
ある人の妻夫乃爪をぬるをさゞめくゆハ辰の日形り爪

辰ゆ龍有り龍ハ爪形にて有るゆゑ爪ハ人笑くさゆゑ
たゞれ人笑くさゆゑ爪ハ人ぞの妻大いなるぎりぬる
て雄名をすめらるゆゑ
女ハ乃あの美しきぎ罷せられて人の中きを愛する人ハ
ゆ拘ハ形のめでくきを好くゑ所り切ろき我名人ゆ
ある家の妻ハ美人乃安えあれども妬んみくくしく夫の扱ひ
あるをいきどおりつゝ常ゆ爭論ざりしある所妬この家
夫の留ちゆ猛死しる夫を大河の為ゆ吐血して身まりぬ
妻ハ名を妻とのひ夫を猶古命とゞり人ハ名よりを形ひ
あり松竹にゆとをいたひ鶴龍ゆよりづ代我比たるも

○

家を治るハ和合ふあり七生を書生まりとをるべ
勢州関の南家ハ吉右ゑ門と云ふものあり父母ハ孝書あり四
十余歳のころ家業に出るゝ時そのまゝ母いとけなきを
思ふれんを抱きゝ吉右ゑ門が足を洗ひつゝ〳〵と云ふ背
ゑずゝ〳〵洗ひのそゝふ但せうこの一事を以くまづの行ひ
遂るところをきを知まり篤実ハ性人のるゐむを聚こ化乃
人をたのめゝ吳兄を子〳〵已れ不敵することをのをすくすを以て
後ハあゝき業も隨つ陽抜を結のんぶ〳〵も好くして人
ゑゝ修徳を施し家業ハ往還ハ和ある所ハ往還ハ和て後を造り
講あるところへ搭をかけ呂浮事のゝあれゝ不志を表すてあゞ
てゝふるまいとまあらゞ

○

むゝ〳〵江戸ある山の麓ハ犬掘助ハと云る猟の問屋あり助
ハ性人を形り性ふゝ〳〵義をこのゝ義ハ遠ハざる行ひ
あることのをハ資ゝ行義ハ遠ふもれを豪強乃士ゝりとも是
を許さゞ常ハ徳行ありゝ侠者の安えも知ゝざる人あり
ざりきゆゝ所色ちて人を殺せ〳〵者の捕れゝ町の番屋ハ
形られしゝ者のいひるゝを犬掘ぬ〳〵ハ逢まるゝ七夜を
の結ばハ宵うのところへ逃行ゝ〳〵といふまぞ出よ〳〵
助ハふつゝへハ逃ハいゝある者あゝとゝ助ハ行て付まるて
兄ゝゝざるものあれバるのゝ方ハ手がいまゞ知〳〵ざることを形り
何の用ありて遠きよ〳〵ヤあやとのゝぞるれ者ゝくいへ
るよハ家ハ口論のゝへまゝ〳〵あやまちて人を殺〳〵結ばハ死を

いきてうも悔ひざれども一人の老母あり家ホ乏しく住る時ハ母必飢
ま及びをんこゝろそれはまんホうゝ住れバ一旦命助うゝて母城
書ひ送りてく好死よつきてくゝ石ひ住まずいろホとしてく命を
助けをんうゝと後子がうホひさすゝ教えけれバ助ハ安よりあらま
よそひ孝心の君ホあるまぎきてづゝ孔口論よ里事起り
互て人を殺すと云ふ絶たる思君といども孝書の志
ホめでゝたすけつゝすべゝ母を大切よせよとくいまめを祖き
て助ひたるちゝこづゝ此よゝを聽よ訴へお生バ罪人を私
よ逃せゝ罪科うゝゞゝ助ハをゝ人罪人と尋ねおすまぐ
禁獄せゝむゞゝて三年ゞ召獄ホあゝうち助ハ病て死セ
里戸ハ牙よりの君門ド町ある易行院よ葬るその書次く

助ハゞ義ふこよ自殺ゝて門宗の契りおゝうゞ今ホろのちるよあり
ある人手ホ面を学ぶんとを乞てさくゝ云やう僕面を学バ
んとおりひおこゝ右よゝ之他の面城面くをもとあずゝ冨
士と達戸どのくを面きくゝとのうゝそれも上手とあゝんをも
求めず冨士ハいろホる冨士と又達戸ハいろホる達戸と又ある
やうホうきくゝとくりこの門尋常よきあまでもいとおりゝろ
しすゞゝれ驚何ホよゞゞおれどころをよゝ見きまへぬる時ハ色不
及あゝべうゝず

○

ある徳侯隠居せゝれて副郎ホ家廟をうやゝゝ尊ちひ朝
暮廟系の祈ハ天地大恩の祈謝左平 主恩れ祈祷先祖代こる
恩れ祈祷 ゝのゝ唱ゝれて他の勤行寺ゝ何宗の僧正とゝうゝ

○

其の侯は十五人え〜ときこゑど浮世のもとハ乃形ひあきまろとやさ
まけれバ浮世の事ハ手ゞねゞねんよるを人の命ゞおろゞゞ多
うれぞそまをとめんと地をふ形ゝ手ハそれよくねゞゝと乃
熟〜たるものゝ布掛〜〜浮世のるハ要ほんこゝ手されうう
世侯よく浮世れ尼をゞゞ母きまゝゝれもひ〜あゞ
平氏の士れ侍を書る中ゝ雑波次郎ゞ篤孝の純のこと
を載う次郎ゞ母ハゝ松屋れ乳人ゝ仕ゝ厳重大義ゝさ
つゞゞ金〜業ゝ十ゝ〜〜友々ゝ陸う掛ゝ雑波ゝ住尼
居るところ蓬菖人を浸〜家きゝあゝ貧〜ゝ〜ゞ次郎
孝ゝ母ゝ仕ゝるといよ〜恭種ゝて農業のいとゝ彩を展
ゝ市ゝ鬻ぎ子ゝ被待るゝ〜とゝども母ゝハ浦味を考やり浮

平家ゝ仕ゝゝ邸を治中ゝ母ゝ迎ゝゝ母行ず〜〜
云老姫業すでゝ六十ゝ余五ゝ世ゝ在の日ゝ〜後々官ゝ
仕ゝ子を立家我起す北附亦北さあるにひとゝの老姫の為
ゝんひゝれゝ手ゝ石ゝ懶らバ右を考〜名をゝすれ好あゞ
ゝれ欲合ゝゝ見ゝゝ都へ行ゝ栄耀あゝるれ志〜形〜と
て逆への事を浦ゝ陸〜て自害〜ゝ果ゝう次郎無欲ゝ
怯ず〜〜考ゞ〜れゝゝ母を乞ひ友々ゝ陸ゝて老母の子きあ
ことゝゝゝひ浦ゝ立ゝゝて清ゝ古ゝ供書乃地義燈をゝと
あゝいよ〜忠勤とむゞゝおゝゝ法ゝゝとゝゝこの事平家も
のがゝう感裏祇あゞゝ見ゝゝゝ忠孝をあゞず〜〜ゝさゝゝ
功もゝき人乃やうゝ考ゝ〜侍人ゝゝて〜恨あれ人も悪のことを

あぐれば善人もあ〜くつくへ善けこあぐまいバ悪人もよき人のど
し雑波水命ハ生涯の君よつくれバ孝諫君やうあぐ〜う
づめれるハいとこをし〜きとと形ずやう〜その仕ることろ君
くたるくをはぞ実は浅くしるやうべ東
一休禅師業師よおそせ〜時宝名の策はこころやすく糸りて
おがくりのついでとふ品吳足やうハ君よハ愛きれ信ふくお
ハ〜ませども鎖りまおつけよ人を義化しのハ在位の筆ハ
おいまひるどいくせるものどもだろまくくりて弘通よ使り
よくくで志〜あるれたをせハ遠ざり仕るあり不凡のやくう
を拭ふ凡夫まハくくめでくき事とやさせみたまくさあく
バ悦びく後伝〜糸くする若多くくべ〜あぐくくハよく〜きこ

こくハこれぐくくバくりおりひてあ〜きとをこころ仏人けうくのこ
心はるあくひふく〜信るそとやたるふ禅師こくるくよく〜心
はくくこくく業ととりまひくくを
仏教ふ住在すまバ〜めを〜く本ろ三宝の海よ〜れ
ゆまとを〜く〜木とを死〜く巌振よりてハ骨まさ
浄〜

と書〜くくこれより外はめで成とハ志くずとけはつりとや
都をく岩ちをとのふところありそこ乃会仏者の黄金と正
会城といくりとハ思谷ふ居て会仏の上手と呼ばれ日〜京
へいぐく拝殿するくくくの声けよきに免でく来殊多くそどこ
〜くるぐ此信ふありて飯を焚たる附を挺ふ法〜て肩ふ

のセ拵仕れおの位牌あるをこころと一通づゝ書うゝそれ親
それ親そゝく拵来まそのほゝんを含セ自も含て第よ仏器
形どへも巻ても供セず茶湯もこれと同形ありされバ何
ふゝくも仏おへ拵引しゝるよふあゝされバ含すると第〜清掃
の歴ふをゝ子ま形ハ境内ハ建ゝる石地蔵を拵来りゝく塔
掃よゝつけて下さまゝ〜とゝくのセ盃きゝゝ筋くゝれど
ゝるまひ〜て更よあゝよゝゝ内食すまゝでも変〜てちあて
含すゝを乳〜女犯もあゝまゝとハ世ハれねどちよハ老婆を
嫌ひゝく下根下男のゝを仕ゝり此正念ゝ書ゝゝ拵起請と辞
世あり

陸居一拵起請

をゝゝ〜乗朝のゝゝく〜れ智者達乃技〜ヤさゝく陸遁の
陸ふをあゝゝ又学問〜てゝのゝを修ゝてゝゝ陸遁ふゝあ
ゝゝ呉不用の君れ為ゝ世れ財とふゝゝとさへゝゝれバ
類ひまく気乗ゝゝゝとゝひゝて強居するより外ふの
子細ハさゝ〜ゝゝ但〜行人乃世ゝゝゝとゝ中とのれ〜ども
ゝゝ衣食住れゝちにおりゝれゝこの外ハ欲深きをを
存セバ諸人のあゝれゝゝふもゝゝゝ〜假令薦をゝゝ糟
糠をゝめ人の形骸ハ臥せゝとも食てハ森食ゝく〜ハ遊ゝ考ゝ
代れあゝゝきを忘ゝゝバ子そあ乗ゝあゝゝとを生ゝ
ゝひもゝゝゝゝゝれあれゝこ

辞世

○

まゝ〳〵足てもまて足〳〵をも皆月じをこゝらでちよつと死で足よふふう
此法帥書帝の老さまおもたれざまじを京よてハ只会仏材
ず主さぞろうまびくゝろの形状を知る人まれあり
有馬よ湯あこせ〳〵附日者て湯掛北中五年同亀のあき
瘦法帥のひろうゝろ〳〵とふるを足〳〵年ハ大ま驚き抱うげ
より窺ふうちきうく湯あこしで出行く寄骸骨の待あさ
ぐふさろふ〳〵狐狸ごもれ足をぶうゝ〳〵ふやとろの枕ハ湯
あもふうで国〳〵ぬ枕あけく此事を家あるじふうゝ足まぞ
ろれころおか〳〵ハまりうふ人ふ足彼女尾ハ大坂の唐松あき
人伏又屋てふ家の娘ふく〳〵ろも美人の実こあり足まじも
姑の病〳〵おハせ〳〵ときに隣より失火ありて火のさやく病姑

ふせまり〳〵ぐたすけ出さん人もあり足まぞうの尾とび入ふく
抱へいぐ〳〵まあゝせ〳〵人あり足の時焼ぐれろ疵ふく月八五
法ぶぞうゝ明てあ足こを口を五合ぐとあれど食ふは事ろう
今年ハや七年業ぞうゝと変ろうといるまいとあり雑きんと
あるひろく浮ぶおかゝ〳〵ハ人ふもろういぞぬ

○

派華ハ紀伊国屋赤右ろうといるを大家の商人ありけるぶ
ろのろぐ年まぐ若うりしろ本家何業ふうろ人く正直ふ
るぶ四百ハ五人足をあれこるの才ろぐ家はつとむること九
十余年ふれぐる明これんを書〳〵費をいとひ家業を大切ふ
する社志淳ぶくろうころの褒美ろて金百両のをとでをき
すあ足ばこれをりて何変へありともるの才ぐんハ任せ家を

扨ち出精して子孫代々利倍を切ずんば再び乞ご家へいでべからざるよ赤ちゃんハ泣くく神ひろの百姓を交ゝ孔と後〳〵いと女をうげて京都より登ってきおとつあま百乃屋多くゝる中に大商〳〵大利を貪らんとする附ハうゝ〳〵大抵失あるべきと常ありうれど日〳〵ふ費と知るものを奇うて浪世とヤバ小利といへども益あるべ〳〵その中紙ハ利のこすきを乃ちいとど日和多きものあれバ唯簾紙ハ捨るべきをあきあふ〳〵として西の泉院より弟〳〵簾紙を業とし紙屑を買ひて漉うやく〳〵ハ壽り〳〵ふ百姓をりとて手をとして三年せだろうゞ百ど小三百姓の利を得ゝ又ゝの金ゝて廣く家業を拡〳〵ゝにまく五年ゝ子孫ふもあり〳〵主人

ふまゝえてうねくなハ〳〵百姓をハとせうもぎつゝ家どふ子孫あよハ形〳〵付ゝぬ〳〵主人へものよ〳〵中のべゝ〳〵ふ主人大小貴美〳〵その丈ゝ家ゝ動〳〵ゝより易常ゝぬ志ゝ忍つゝも名ゆくゝゝひつけゝゝとありこゝびハあれ子孫を拾形一万姓ふすゞ〳〵とあり笠ハ異り又五とセをりぐゝゝち小二万姓に信〳〵主人の家へいで風紅〳〵ゝまハ主人まく大に貴美〳〵てこの一万姓をこれ殺ハ十百姓ふゝく足ゞ〳〵とゝゝを赤ちゃゝ〳〵ゝまり中ゝゝハ七じめふ〳〵百姓を子姓あゝ〳〵ゝれ子姓を一万姓ゝ主手まぐハゝれ拾れゞも此一万姓城十万姓ゝおさんと何の子細ゝさむゝゝべきて三ゝセも種姓ゝゝ十万姓ゝ信〳〵来れハ主人ゝの働きを

感じくるの幸抱この上を差図すべきあるもあるねどこの度
は百万文あも信ずづくとのれば赤ちゃこそ十万文
のこゞねを必ず百万文ますると八幸労するふ長ざるまり
さて形り侍り夜とあり当時主家社の弟いるるの店儀
ふく侍るふと向へば主人ごこへてどぶ弟よいるるいふる
ぎるもあるざるれりそのばさるどのたくさへおく〳〵てとそのの
上ふも拵こゞねをゆく〳〵とやく〳〵ほさひるふあやとえば拵ゆく〳〵
とゆのふといまぐ能とをあるずといふふ赤ちゃまさやるるハさ
あるば此こゞねを信するとをゞ見を限りこてゆきれり〳〵家
ホハ命こそ宝あれ命あるくのうへの財あり命なくて財
ありてを益ゞとやふ主人云家ハまこそのすとハ心ふるくハ

るふ遠了対を拵てこそ世ふあるひとこのれ命あること
て対あるくゆ生るくれるひゆ〳〵と却ふといばホちゃるゆ十
万文を主人はそのまゆ乃ふまでのとハ幸云の弟あれば
作ふるゆきゞくゞくよりゆ家弟ゆゆ家ひの侍ゆ暇ゆくて
このうへれをハやるゆ〳〵ゆくいるゆを見てどぶ家ゆるるゆ
若年のこゞねを縁ある年ゆ那り分弟をゆまひ限をそる
国智材と改名しくゆ大駅ゆ乃侍弟とゆり京へいでゆ番宝と
うまへ日くホ拵弟くゆ洛ゆ終ゆるそのゆるれ若大駅ゆふ
塚を建るゆ石に刻める辞世の句ゆ
落くゆ行ゆくゆの虚を歌うんいるゞと欲めゆうき元ゞゆく
洛ゆ源義経十命といふ人あり源平篤実ゆ侍若あり平ゞ

東山は寓居せしころ碓ゐ井は住るゐ四条を通りすぐるに
ハあるゝて利あるときハ五条三条をまたれり遊里芸居あどの
所ハさけて通るゝざるゝ常ハ倹約をもるとを事る人ハ表例
してこゞゝハあるよく鍋の形を形まセ常は猪熊のゝさきゝ
ハ至て一肉の美味涙更乃舌既ハあり大丈夫何ぞ飲食は心
をとちふることをせんやといへり

生駒山を越るに日炊篠といふ村をゞまハぬ輪観音をあ至
する堂ありさすゞ名は神ハ山色風景郊野のあゞめおをしろけ
ま八此堂ハ三寄てたゞとこゝゝらゝゝ巡るとおゞゝく斤
月ちひゝる男の卒都婆をまつりあるを見くまる細工せゝる
みやとゝハ削まきゝゝる卒都婆をゝゝ入は意く園炉の灰うき

あゝゝゝんは屠禁でゝびたる瀧子ハ湯をゝぎゝゝセ茶漬のつき
たる茶挽茂丁寧はあゝゝひゝぎて大坂よりゆゝひゝ茶あり
ゝく懇ハ煎じあゝ入ぬ予も んよゝ二三椀を喫して志バゝ想
ゝるゝちまのいゝるゝ和ハゆゝ此地の産ハくをかゝしゝゞもさ
調度はさゝ抱を戒ゝて二十一年ゞどを系ハくゝゝつれど
も不仕合あゝをゝ歩法ぎきゝ茶ハより月ハゝろゝゝ坂ゝのある
ゞあゝゝゝこの地は老打ぬる形を茶乃湯といゝるをゝゞめ
ハゝゝるすさびあり起里ゝるゝゝあゝといひつゝ菓子を椀は盛
ていゞゝつゝ志バ予ゝゝて見ゝゝ多ゝの木花茅は味噌をゝくく
ゝく炮やゝたるかゝ弥ゝゝまゝ口云ゝあとていとうまゝ食て茶数
椀をゝ志ゝゝゝゝちまはハ彩ハ系の在ゝ沢数の茶人家

瓦などの彩染まるゝ迄茶席まることも稽
古なれど伝れど大らかの人は茶せ場とぶれとのやうふんるをひて
あつらへもいとむづかしくくの東山ふゝ何菴とゆ宗五の
建てる席に茶しを名ひてその好れうさよ建たゝとほ又
元しに床板と松ふして節七つある残好めり茶おろふよいろ
ふるとけふゝ節数七つある板をとゝむるふやといぶうしさ
ふ問れバ師の建てる席よ床板の節七つあり是バ是を
撰するあ里といろ笑ふべきけ要しきふあゝずや師の造
ふしてこゝきを宣ふて節なき板のおきまゝふふある板ふゝセ
られしふゝぶゝさあれバいろよ師れあとと墓へバさゝらぎ〳〵庶
あることのを求むるハ是を嗣よハあゝで輩よあゝひて師の病就

あゝ是とはどゝくゝぶゝとせるこの是ハ見きよゝふセよく
いつよハあゝずきこまゝ是ハ是ハ変是を見ゝぬ和
を何ふふゝゝれ時乃君よ会するを勉走とふする形ゝぶしす
ゝおりしろきをハ見ゝぬをろふありて見まるゝふ飛
子ゝと形しゝ人よまゝかくセありてきゝゝふ好ゝを致セども
くゝを捨ぶ五ハ風流の是人よハなゝず理ふゝ理を通れさ
る人ふゝねバ茶好とふれゝふふれ結ゝバ
とてその立居ふゝゝひふどおくやうゝこの者を建行く
教ふゝ書ひおきゝゝ何ふ書ゝセこゝげふを志ゝゝ
乞れれども年筆ふりとゝ建よゝず分りぬ平ハあまりれ
おゝゝろさふ紙会よあゝ造れゝ平那婆を一幸求む

ぐしらんぐ えんぐ さくらぬこの ありやめ へさあくばうねく書
くりのあり髪を結くすぐしくく反古の中より一ひろ拾ひ
出せしを笑て問まぬる孔文左の如し
ふく拾ずれども おくするものを土ぐ生り土でするものを
舎ふく 旅へずおきでする ものを本よて洗ふを土ぐ洗る拾ふ
土で生るぐ 舎ぐ ふくぐさるものハ舎ふくへくくくく調反
ハ拾ずるをひとひて おくふく 俗もれを舎ふてすくくよろ
しくくぐ 妖筆 与平とあり

○

市僅の西風ヨ 疫病 麻疹 痘瘡 流行の病あるとき ハ虚
舌者神へ祈会しく 里民 高の唄ひく 踊とあるの ものよ
誅やら 伊勢と 春日の 社孫 義 義 拾ぐ洗ぐいく 舳 舳へ

○

ふ者伊勢と春日社ハ社やしろでハ何ぐ おそしろの 護ア
んぐ ぐく ハ護ア をくくハ手洗でハちぐ 始終 そろ その 護ア
とふんとたきそろ。氏子 多ふとき そろ。

○

猫を飼ふものの多くハ猫 殘やしふとを ちくず 飯をあくふる
ヨ 鰹ぐしを ぐ 肉味を加ふ猫ハ 常ふ 厚味を 食ヨ ふ肘ハ 亂ぐ
くくく 猫を麦 とくきく 味噌 汁をうけ ちぐ しその 化 化 食
をあくふぐくず 常ふ肉 食ヨ ふくハすぬ ハ肉 ふき 肘ハ必 化の
家ふつくて 魚肉を 盗めり人を 書ふも 石浸 ちくり
最法 印 刃 吾の文 故 ぬくふれし 肘より 書くこくくよ 在く 書ぐ
しの ろも 離くくと 肘しくこのどくも ぐ 犯ふもあくくく 子ふをあ
らぐ くくふも 居くくひふもあくぐ 妻ふも 何くすめ 化とふも 何

らず只おけ金要あるとのこゝろ〳〵して更に他の業をなさゞ
るこゝろとおく〳〵怒ることゝ好く〳〵あれ五出を多く乗り如と
なしおりふ日去みる者を友とすれば是を捨んとすれふて
づゝひ耳去ゐたる者我友とすれば是を安せんとするよ炊
唾を友とすれば是をさとさせんと思ふよりほらふ故々五有
あるよりおろく故ゞ矣をもちる五又故ゞ矣よりて五有
と去ることゝろを去ゝ〳〵そこゝろ〳〵あんぢは五影あるもく又
人の影あるゝ

○

飯食の費ふ米麦は勤めおろそや明れいとも明分
けれど飲食は是しるゝ人は世まある是とひと〳〵此ものゝ法
たる孝ふ儲座の焦を削まて冥想は湯の移れ洗ひあゞ〳〵を捨

○

す鶏ハ日ごゝ米飯は湯のまに撓を加へ餅もあまぬく大拙菓
割麦乃粉をもれ〳〵月ふ婚ゞれ功米りてひゝ家門の煙
栄をてゝす

○

大系女の費は力も薪子ゞ彩あれ労をゝけてハ弁ハ□
ゞ小廓れ才をを体也

○

さゝ是大系れ山は杉者のをゝ多ゞ業と後ろおとをん
弗仏を伝ずるの法も弗仏は体の下を出すびく会せぎれ
ハ威薩子〳〵とそさ生ハ天の恵を受んと彩る者も天乃あ
ゞ〳〵ふ私あるゝする附ハ恵外〳〵とゝあゞゝず人ゝまゞ
たるもゝと日生ゝゞ〳〵弗のんも殘れ如〳〵仏れんも考り
の如〳〵天乃んハ伝怙あゝ人れんハ人と用ゞ

人善ハ動うぎるゆゑ悪まも動うず二の念あるゆゑ生ぜざるを
彼念〻〻と不生〻〻轉変し〻〻〻去ぐ〻〻れ乃も止事あきゆの
ハ人ハ乃ち此出るところとよく〻〻知〻ざれバ悪を忍けて善を形ふと
ありがさ乃ぐ〻〻善ゆゑ人の本心ゆゑて事の拘ところのことれあり
悪ハ念より起〻て他より入来るものゆゑ耳目鼻口乃元次人の
善あるあ〻ぐゆゑ告て万の事を為ハ召仕ひ人と同じ〻ことれ召
つ〻ふことのゆゑ善とこのむあり悪をすく〻あり此二つを善ゆゑすれバ
五常三子ゑれ中ゆゑ立つ〻ものまゆゑ人の好あることのこを我〻
く〻爆つることをさけぬるゆゑ別私れ〻ぐることろあり人と〻て去
の私を捨事〻て〻てよろづ形ゆ附ハ猶ま〻〻く囲碁の上ゆある
ぐ〻〻ものれゆゑまきれる人と囲碁きん結〻て勝手とゆゑ私

欲をすて〻変形すゆ附ハ大節ゆゑて智力と尽すところ
あ〻形ひたゆゑの足ぐるゆを法〻〻〻〻変ぐることろと思ふ
の外あ〻

主人ハあのれが仁のれよび義ろと教きく〻信れ不忠あるを恥て
らず臣ゆあのまゆ乃及ぐる我るげきて主の不仁あるを
怨むべ〻〻〻親ハあのまゆ義無のおよばざるを教きて子の不孝
あるを諭すべ〻〻夫ハ妻れ不貞を教ずして おのれが和の及ハ
ざるを教〻べ〻妻ハ夫の不和をあげ〻べ〻〻〻おのまゆ不貞
あるを子ぐ〻〻べ〻兄ハ弟れ不敬あるを教ずして おのれが不
義のおよばざるを教〻べ〻弟ハ兄の不衰をあげ〻べ〻て おのれ
が教の中よぐざるを教べ〻朋友たがひに人の不信をあげ

○

ぐしておのまゝ小傑の及ばざると欲ゝ〻ハ君ゝて臣乃色
をとゝすハ仁なり臣ゝ君ゝ君の犯を諍すハ忠なり馭子兄
弟夫婦朋友互ゝ不孝の色をとゝゝハ附ハ忠孝哀敬交及信義お
のづゝゝの限を中はあるゝ〻偽も表と色まぐ〻のつゝろひ
ゝてやむゝ〻飾るとも偽のあゝ不誠の本を失ふゝゝ
年ゝゝゝ〻色あるなをハ年骨ゝ〻ゝ老とやうあゝす老
ゝ色あるなをハ慣貪ゝて邪見あり世ゝ色気とゝふハまる事
敬のつゝやとゝねいひゝくあるゝ〻ゝ不嫌欲のゝゝまあゝ〻ゝ
色あるなを)ゝ人をづゝず農ゝて色子ゝれゝ和育たゝず子と
ゝゝ色形なをハ巧ゝ言あゝ高ゝゝ色あけれバ人間ゝ天
地の子何のゝゝ色あゝ〻ゝて八一日も世不立ちゝゝ〻ゝ孟子

○

ふいたもゝ大至色を好むの辨ありふゝ〻
人倫は孝ゝ悪の心より出ざるときハ仁義孝悌和愛敬そ
の信ゝゝ〻ゝ人情ゝ〻ゝ戒乃子とおをふ心死あんと覚悟〻
たゝ心この化ゝ徐れ〻ゝ此誠心悪墓よりいゝゝ悪情子き射ハ
不仁の君ゝ君を殺すゝのあゝ不義の臣ゝ孝を忘ゝ者
ゝ〻ゝ〻ハ顔淵ゝ要拒能せん此刑を〻ゝゝ方をゝ言ゝら
ゝの子おとひやゝゝ〻古ゝゝ
悪ゝゝハ人ゝ心の子ゝゝゝゝ〻拘れおゝれゝ元よゝゝ
繫境附云不幸ゝ主君の眼境ゝ召仕ふものを〻〻人と
兼さゝめ恭然不恥の月境ゝゝ子を〻て善ゝゝ〻ゝ〻予
贅境ゝ人の一すゝ才を見ゝ〻ゝ要ゝ一尺ゝゝも

とのをとをしをせ〜むあるの袖のくろうを目くふ拭くおのまゝゞ魂
を見なけゞ假令照广天眼乃名聞あるこゝを求るふ見らず
世人鬢擽を懐ふ〜て他乃毛孔と世の善悪を見出すを
あゝゞくゞくといふ

○

槌積氏の老母昌夏尼ハ洛北言寺ニ隠居す風流世ハ
すゞれさう雅者門ふ充てう座ふ十畝ばかりを栄こ〜ろく
苅るとし〜世人一生を元殘しの業と思ひ懐の米を待ふ
まゝさ座園ふ暫日ばかり米ふ喰ふくとよろこび掘ふくてある
ばゝずばゝく洛東ふのとむれどもんようふひとる古米ふれ
バ人を扉ひゝく掘りのとむるふ嘆嗟ふ老未の大いふるありと
笑て多く便と費〜ゝく座園に載ゝうるふ掘とう名ゝゝる日

○

より〜てうの暫ゝくへう形りん終ふ来ゝずありぬ
六法牒犯云綾羅珍綿をく板の物を造ふ落のれすゞ〜ふ
扱乃ゝゞらせ〜きを通るを宣級ふ斤毫地ふるゝく氏の系ふ
洞虚と洗るとと城ふゝゞるふゞ〜土蛭の火神ひゝうハ乃具
罪を業会ふく紙ふてつゝれる板牒一殊柔屑うふ者乃胖を
うふゞ尼ハこもあれ盗人とを〜てんを動さ〜むるとふゝゞ〜
落紙一巻ふ世塵とさけ温をのゞきて寒冷ず風とふゞ時ハ
ふ演ふあゝよりも凍〜く書を見ゝ射ふ蛍雪の面よりも明
〜ゐぎゝふき窩を人ふ見せぬゞゝ反侯ゞ妓衣北乃ふ
まされ星畫ハまゝめて屏風のゝ〜ゝく投ゞこ杉月を西ゝ北せと
もれ〜林玄冬ゝ来ふ被ゝく素雪のゞげ〜きとも凌ゞ

ハ一拙にして六用あり 彼左宗が舞のかうたゑハよくね
どろ王ご笠子名をちつちて六法の蝶とよびこちころあれまゝど驚き
たる山乃奥にもおのひかるず只一孔ちちて延臥してやがて出
じとハおとをひろくなり
羯广乗釈ハきハめて面すの上手なりしまでもひとつせに一つ
ハおず性得とこのみて酔て舞かなを楽しむあるおりから
老母の労りなるをもや米の槌子ハ蜘の巣をかけさり勤めて
おづきにやとせめたれバ乗釈おどろきてさあらバ翁よりし
て悔らバおべきれ果こそ篭りなるが四五日を経て面をおて
あつらへさするへ持行料を持かへりて母子なれてしなきバ母よ
ろこびて先まで多くの金を得しハ面いくつおたるやとくふ

にハおもておくりさんれざま修子多すぎるがその中に七面おれ
ぎく家子のこゝりさて立おし又やさ鬼女の假面あり
けるバ又ちき人おそろしくて傍子おきなりそれ夜盗人かくく
親子卧したるを何にとて又母の其鬼面を親子おかひて眼の
前より又手がらやよ盗人のかゝるぞ乗釈おきおといひなるを盗
人又てあとさけびおとろきいづくともなく逃失ぬとぞ

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan